市民研究員に聞く！

「研究」なんて聞くと、少し難しそう…と思っていませんか。そんなことはありません。
活動はとても和やかで楽しいですよ！市民研究員の皆さんにちょっと話を聞いてみましょう！

市民研究員
遠山典子さん

率直に参加していかがでしたでしょうか。

楽しかったです。ずっと学校現場で歴史を教えてきて、研究も大事ですが、それを普及させることも大事だと思っています。今回の市民研究所で、いろいろな先生方から学び、皆さんに報告できるということは、すごくうれしいことだと感じました。これこそ私が求めていた仕事だと思いました。

研究を通じて、米百俵のイメージが変わったことなどありましたか。

米百俵は、単純に小林虎三郎が偉いから、三根山藩からもらったお米で学校を作ったという程度に思っていました。それが一般的なイメージだと思います。しかし1年間の研究活動をさせていただく中で、実は米百俵は、長岡藩で受け継がれてきた教育と精神が、長岡藩が終わる時に、あのような形で現れたものであるということが分かりました。藩校教育の精神は、今の教育にもそのまま通じるものです。それらが分かり、改めて長岡は素晴らしいまちなんだと思いました。まさに「志」「誇り」といった言葉でまとめられると思います。

3つに集約しましたが、特に伝えたい、知ってもらいたいものはありますか。

いろいろな発想の方がいて、みんなで相談し、長岡市歌と4文字熟語と合わせて、3つの精神に分かりやすくまとめられたことは、大変よかったと思います。その中で、あえて一つ選ぶとしたら精神Ⅰ「志」「誇り」不死鳥のごとく、何があっても生き抜いていく精神（こころ）〈常在戦場〉をあげたいと思います。常在戦場は長岡藩の藩訓として伝えられている言葉ですが、これからの時代、何があるか分かりません。ただ、戊辰戦争や長岡空襲の時の長岡の人々のように、何があっても生き抜いていく精神を次の世代に一番伝えたいと思います。

逆に苦労したところはありましたか。

研究活動は楽しいことばかりで、苦労はありませんでした。仕事や家庭もあり、その緊張感もあってよかったと思います。活動中に旧長岡の学校で定年退職を迎え、支所地域の学校で再任用になりましたので、旧長岡と支所地域と両方の学校の雰囲気を肌で感じることができてよかったです。

印象に残った活動は何ですか。

学校にうかがい、先生方から日頃の教育活動を米百俵の視点から聞かせてもらうのは初めてで、それぞれの学校現場で頑張っておられるんだと改めて感じました。

報告書がまとまりましたが、今回の提案がどのように活かされてほしいですか。

次の世代に、「米百俵は富士山」や今回まとめた3つの精神は伝えてほしいです。これは教育の根本に関わることだと思いますし、小林虎三郎も河井継之助も三島億二郎も牧野の殿様も、全ての長岡の人が望んでいたと思います。

長岡藩は、もともと、武士とそれ以外の身分の人との垣根が低く、かなり開かれていたと思います。お城を開放している行事もありますし、そのようなところはあまりないのではないでしょうか。その中で、地域の教育が江戸時代からあり、それが米百俵という形で幕末・明治維新の頃に象徴的に現れて、長岡からいろいろな人を輩出しました。その精神をぜひ伝えていってほしいです。

報告書はまちキャンで

今回のまちづくり市民研究所第2期の提案内容をより詳しく見たい・知りたい・読みたい方は、まちなかキャンパス長岡に備え付けの報告書をご覧ください！
また、まちキャンホームページからもPDFをダウンロードできます。
報告書はまちキャンで！

まちキャン通信号外×まちづくり市民研究所 第1期 報告書 概要版
編集・発行：まちなかキャンパス長岡運営協議会
〒940-0062 新潟県長岡市大手通2-6　フェニックス大手イースト 4F
tel.0258-39-3300　fax.0258-39-3301　HP http://www.machicam.jp

＼きになるがここにある／
まちなかキャンパス長岡
machinaka campus nagaoka

まちづくり市民研究所 第2期 報告書 概要版

まちキャン通信　号外
まちづくり市民研究所特別編集版

Topic

まちづくり市民研究所
第2期、研究成果まとまりました！

まちづくり市民研究所第2期は、「『米百俵の精神』伝承・実践プログラムづくり」がテーマです。長岡市に脈々と受け継がれる「米百俵の精神」は、戊辰戦争後の長岡の窮状を知った三根山藩から贈られた百俵の米を藩士に分け与えず、国漢学校の資金に充てたという故事に由来します。
この米百俵の精神について、これからの未来に伝えるべきことは何か、それをどのように広めるべきか、市民目線で調査・研究を進めてきました。その研究成果を提案します。市民研究員の皆さんの想い、願いのつまった提案をご覧ください。

まちづくり市民研究所とは？

市民の皆さんが、身近な地域課題の解決策を創り出す市民協働プロジェクト。学びで得た知識や経験を活かし、地域社会へ還元するための実践の場。1年をかけて調査、研究を行い、市に提案します。

＼きになるがここにある／
まちなかキャンパス長岡
machinaka campus nagaoka

提案は、
裏面へ

未来へ伝えたい「米百俵の精神」

「米百俵の精神」…長岡では、ひとづくりやまちづくりのキーワードとして、よく使われる言葉です。
しかし、明確な定義がなく、さまざまな解釈が存在します。
今回、市民目線で議論・研究し、これからの未来に伝えるべき米百俵の精神として提案します。

まちづくり市民研究所 第２期 体制

テーマ	「米百俵の精神」伝承・実践プログラムづくり	市民研究員	8名（公募、推薦））
研究期間	平成26年9月～平成27年10月	オブザーバー	公益財団法人長岡市米百俵財団（市教育委員会教育総務課）
所長	羽賀友信　まちなかキャンパス長岡 学長	アシスタント	1名
ディレクター	松本和明　長岡大学 教授	事務局	まちなかキャンパス長岡運営協議会事務局

つなぐ

藩士は迫ったのか!?
～米百俵の実像～

戊辰戦争で焼け野原になった長岡藩に、三根山藩から米が百俵届きました。この米を分けてほしいと迫る藩士たちを前に、小林虎三郎は「食えないからこそ教育するのだ」と、その米を売って国漢学校を建てました。これが有名な「米百俵」の故事です。
しかし、この藩士たちが迫る場面などは、山本有三の戯曲「米・百俵」で創作されたものです。
史実は以下のとおりです。明治2年、長岡藩は仮校舎で、国漢学校を開校し、士族の子どもに学問を教えていました。翌年には新校舎へ移転し、正式に開校となりました。これは崇徳館や就正館、済世館など、多くの教育施設が江戸時代からあったという史実から、長岡藩はもともと教育を重んじる気風があったと考えられます。
また、国漢学校は、庶民の子どもも入学しており、身分に関係なく多様性を大事にしていたことがうかがえます。
そんな中、三根山藩から贈られた百俵の米は売却され、教科書や教材の費用に充てられました。
このように、国漢学校の開校は、近代的な学校教育のはじまりとなったのではないでしょうか。

まとめ
- 江戸時代から、長岡には教育を重んじる気風があった。
- 百俵の米を売って学校を建てたのではなく、学校の予算はもともとあり、教科書や教材の購入に充てた。

つなぐ

米百俵は富士山！
～長岡の誇りの象徴～

今回の研究で、米百俵の精神を分かりやすいものに例えることはできないかと議論した結果、「富士山」にたどり着きました。
「富士山」は、日本の象徴であり、見るものに感動とパワーを与える唯一無二の存在です。「米百俵の精神」もまた、富士山に劣らず、世界に誇れる長岡の精神の象徴です。この2つには共通点が多く、より米百俵の精神を理解するヒントになります。

高　米百俵の精神は、精神性が高く、私利私欲がなく、他人のために先を見据えて尽力できる心です。みんなが目指すべき頂上であったり、普遍性があります。

広　米百俵の精神が誕生した背景には、さまざまな身分、個性、地域を受け入れる広い裾野があり、長岡を問わず広い地域で多くの人材を輩出しています。多様な価値観を受け入れる広い裾野＝多様性を大事にしています。

源　米百俵の精神に触れると、富士山の水源や御来光のように、元気、勇気等がわき出します。いつでも、どこでも、どの分野でも活用、応用できる汎用性を持っています。

まとめ
「高」「広」「源」の３つをキーワードにすると、
富士山と米百俵の精神の共通点が見えてきます。

つなぐ

これが未来に伝えたい米百俵の精神！
～過去・現在・未来 人を育む～

「志」「誇り」
不死鳥のごとく、
何があっても
生き抜いていく精神（こころ）
常在戦場

「学びあい」「知恵」
世の中の役に立つ
学問で、豊かなまちを
つくる精神（こころ）
士魂商才

「笑顔いきいき」「実践」「しなやか」
みんな違っても
知恵と力を出し合い、
ともに生きる精神（こころ）
互尊独尊

これまで、長岡に伝わってきた「常在戦場」「士魂商才」「互尊独尊」といった言葉に集約し、未来に伝えたい米百俵の精神（こころ）としてまとめました。
「志」「誇り」は、不死鳥のごとく、何があっても生き抜く精神（こころ）。これは、過去の長岡において「常在戦場」という心構えで受け継がれてきました。
「学び合い」そして「機知と知恵」に富み、世の中に役立つ学問で、豊かなまちをつくる精神（こころ）。これは明治に入ってからの「士魂商才」という形で、長岡には多くの商工業が起きました。
「笑顔いきいき」と「実践」を重んじ、「しなやか」に異なる個性が知恵と力を出し合い、ともに生きる協働の精神。これは「互尊独尊」という形でこれからも長岡に受け継がれていくことでしょう。

広める

広めるために
～広めるための基本方針～

これらの提案や米百俵の精神を広めるにあたり、市民協働や参画を前提とし、市民の皆さんが集い、共有する中で、この精神を醸成していく必要があります。
また、すぐに結果を求めるのではなく、ゆっくりと緩やかな変化の中で、市民の皆さんの意識が変わり、受け継がれることが大切です。
広めることと並行して、時代とともに米百俵の精神がどう変化してきたか・するのかを、原点に返り見直す必要があります。今回実施した市民の意識調査のアンケートを踏まえながら、広く普及させなければなりません。
その具体的な方策として、以下に広めるための案を例示します。

例

産学官民一体の教育ネットワークづくり
総合的な教育力の向上を図るため、支援機能として「教育ネットワークのハブ」となる機構を構築する。

日本版ポニーライド
民間活力により、中心市街地に、協働の起業スペースを設ける。